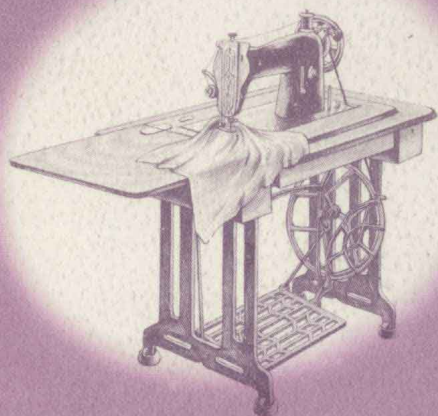


平和への願いをこめて
⑨戦争未亡人(埼玉)編
創価学会婦人平和委員会編



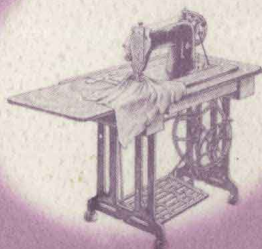
戦後のひとり女

この子のために生きなければ
戦場に散った夫の

忘れがたみを抱きしめながら

母たちは

その細腕で生き抜いた――



平和への願いをこめて
⑨戦争未亡人(埼玉)編
創価学会婦人平和委員会編



女ひとりの戦後



第三文明社

△シリーズ△平和への願いをこめて⑨
戦争未亡人(埼玉)編

女ひとりの戦後

昭和五十八年八月十五日 初版第一刷発行

編者 創価学会婦人平和委員会

発行人 栗生一郎

発行所 第三文明社

東京都千代田区猿樂町二五十四

電話(二九四)八七三二(代)

振替・東京五十一七八二三

印刷所 図書印刷株式会社

ISBN 4-476-07509-6

* 乱丁落丁本はお取り替えいたします

Printed in Japan

まえがき

戦後三十八年、時代はいま、戦争を知らない世代によって受け継がれようとしています。

今もなお世界のどこかで戦争が行なわれ全面戦争への傾斜が危ぶまれている反面、私たち日本人が体験した太平洋戦争の苦い記憶とそこから得た教訓は、時の経過とともに徐々に風化しつつあるというのも否めない事実です。人間と人間とが公然と殺し合う戦争の悲惨さは、体験したものが語らない限り、忘れられてしまいます。

創価学会婦人平和委員会が呱呱の声をあげてから二年有余、平和運動の一環として「平和への願いをこめて」の出版を行なってきました。このたび埼玉編を企画して広く体験手記の原稿を募りましたところ、実に七百部にも及ぶ原稿を寄せていただきました。なかでも戦争未亡人の方々の手による手記が多かったこともあって、埼玉編は『女ひとりの戦後』と題してまとめることになりました。

私たち女性の最も切実で大事な仕事は、いうまでもなく、子を産み育て幸福な家庭を築くこ

とにあります。小さな生命を守り慈しんで育てる女性は、すなわち最もよく人間生命の尊厳を知る者であるといえましょう。最愛の夫や手しおにかけた息子を明日の命も知れぬ戦場に送る悲しみは、たとえようありません。

しかも戦争で夫を失い、「戦争未亡人」と周囲の人々から様々な思いを込めて呼ばれながら生きた方々——。女がひとりで生きるのは、平和な世の中でさえ大変なのに、まして戦中戦後の食糧にも事欠く中で、遺された子供たちを抱えて生きるのは至難のわざでした。

しかし『女ひとりの戦後』は、その中で歯をくいしばり、ひたすら生きぬいた女たちの記録です。戦争に関する本が数多い中で、この記録は、私たちと同じ無名の妻や母が、思い出したくもない辛い戦争体験を、あえて平和のためにと記憶の底からたぐりよせ、自らの手で書きしるしたものだけに、一層、貴重なものといえましょう。

夫亡き後、子供を何人も連れて帰った実家で居候扱いや物置き住まい。和裁や洋裁、土方や担ぎ屋までして、子供と飢えを凌ぐ生活。生還しても、戦争のために打って変わってひどい人間になっていた夫。戦死公報が入ってもなお夫の生存を信じて生きた妻。母子で生きるために代用教員や正教員の資格を取得した婦人等々。

主人がいけないというだけで世間から好奇の目で見られ、子供まで惨めな扱いを受けながらも、ただただ、亡き夫への思いを心の支えに生きた母たちの手記です。

解説は東海大学教授の島田とみ子さんにお願いし、戦争未亡人の実状及びその取り巻く社会状況を克明に綴っていただきました。

また、埼玉県東松山市で丸木美術館を主宰し、広島原爆の図や南京大虐殺の図を描き続けてこられた画家の丸木俊さんにも、寄稿していただきました。

願わくば、戦争を知らない世代のひとりでも多くの方々にお読みいただき、この戦時下に生きた母たちの記録が、再び不幸な歴史を繰り返さないための一助になりますように……と、手を合わせる思いです。

最後に、出版にあたりまして、執筆、編集に限りない御尽力をいただきました多くの埼玉県婦人部の皆様方、および第三文明社の方々、心より御礼申し上げます。

昭和五十八年八月十五日

創価学会婦人平和委員会

委員長 浅野香世子

もくじ

まえがき

△手記△

歲月は流れても……………	磯田ユキ	7
この子らと共に……………	大熊ふさ	18
夫の生を信じつづけて……………	田口妙	27
未亡人とはいわないで……………	荒山キク	40
教職に平和を誓って……………	久保田美代	51
織機の音がやんだ時……………	関ロマツ	62
レイテに平和を祈る……………	沼田みさ子	72
二人目の夫にも死別して……………	稲垣玉枝	83
ミシンを踏みつづけて……………	初見百合子	92
十六年目の戦死公報……………	遠藤キク	102

生きていてよかった.....	上山ヨリ	115
夫をかえせ、弟をかえせ.....	川端はな	123
不幸な再婚.....	山岸とよ	131
“かつぎや”十一年.....	青鹿のぶ	140
迎春花は再び咲けど.....	渡辺絹子	147
戦争が夫を駄目にした.....	日下部徳	157
戦争が変えた私の人生.....	高見沢八重子	169
女であることを捨てて.....	小暮はな	176
母子離ればなれで十年.....	津田ユキ	186
幼子と別れて住み込み生活.....	白井ムラ	194
お父さんでどんな人.....	平木光子	208

《解説》老いを迎える戦争未亡人

..... 島田とみ子

229

《コラム》

防空壕・池田エイ26／父なき娘の作文・田島トク50／千人針・土戸幸枝71／買い出し列車・
林マサ子91／食糧事情・小野美佐子114／物資交換所・岸本久子139／松根油・稲山すみ168／慰
問袋・野中たね193

編集後記

装幀・高久省三
表紙イラスト・前田 寛

歲月は流れても

いそだ
磯田 ユキ (73 歳)

大宮市在住



◇明治四十三年生まれ。九歳で母を、十三歳で父を、そしてたった一人の妹をと、次々に失い、天涯孤独の青春時代を過ごし、やっとつかんだ結婚生活。三人の子宝にも恵まれ、さあこれからという時、戦争に夫を奪われる。遺された幼い子供達を育てるために、女一人生き抜く辛さはいやというほど味わった。あれから三十七年、歲月は流れても、未だに“戦争未亡人”と人は言う。

戦争、それは幸せから不幸への道しるべ、人々はその道を余儀なく通らねばならなかった。私もその一人である。

昭和十六年に始まった第二次世界大戦も、次第に敗戦の色を濃くした十九年の十月、蒲田の軍需工場で働いていた夫義雄は、神奈川県横須賀海兵団に召集となった。

当時、私の家は農家とは名ばかりのわずかな畑と、夫の給料で生計を立てていた。夫の収入なくしては、九歳の長男を頭に、五歳とわずか生後二カ月の三人の子供達が満足に食べていける状態ではなかった。出征の日、お国の為とはいえ心中穏やかではいらなかったであろう夫を察して、私は努めて明るく送り出したことを、今も昨日のことのように覚えている。夫は歡呼の聲に送られて車中の人となった。これが最期の別れとは知らずに……。

夫が出征してからの生活は、想像以上に厳しかった。三度の食事のままならない日々が続いたが、夫の為、子供の為と齒をくいしばって頑張った。それでも辛抱の限界がある。辛くて自分の気持ちのやり場がなくなるたびに、「非国民といわれてもいい、早く夫を返して欲しい。負けてもいい、一日も早くこの戦いが終わって欲しい」と願わずにはいらなかった。

そんな翌年、忘れもしない「ヨシオキトクスグコイ」との電報が届いた。半年前あんなに元氣に出て行った夫が危篤だとは、まさかという驚きと悲しみの中で私は、何とか誤報であってほしいと願いながら、入院先の名古屋の赤十字病院へ向かった。

道中の空襲を予期して、五歳の長女を親戚に預け、長男の手を引き、やっと伝い歩きを始めたばかりの次男を背負って東京を發ったのは、電報を受けた翌日であった。静岡に着いてすぐ

最初の爆撃にあった。暗闇の列車の中で、敵の過ぎ去るのを待つあの恐ろしさは、体験した者でなければわからないであろう。恐怖で泣き叫ぶ子供達を抱きしめながら、もし夫が最期であれば、子供達に父親の顔を、夫に可愛い子供達の顔を、一目見せてやりたいと思いながら「泣かないで！」と心の中で必死にいい聞かせていた。

やっとの思いで名古屋へ着いたのが翌朝であった。今思えばどこをどう歩いたのか、夢中で夫のいる病院へ向かった。病室に入って最初に目にしたのは、虫の息で横たわり、やつれ果てた骨と皮の病人であった。「ご主人ですよ」と看護婦さんに言われなければ気づかぬ程に変わり果てた夫の姿に、一瞬我が目を疑った。意識もなくとぎれとぎれの息の枕元で、私達が傍らにしていることを知ってほしくて「お父さん！ お父さん！」と何度も何度も呼んでみた。けれどもいくら呼んでも何の反応も示さなかった。

そんな夫の傍らの小さな器に、乾葉（大根の葉を干したもの）のスープがわずかに入っていた。見知らぬ土地で、満足な治療も無く、粗末な食事で、しかも身動きできない身体には無数のシラミがうごめいていた。コットンのシャツを着ていたが、そのシャツの縫い目という縫い目にはシラミの卵だらけだった。

開けたきりの口の中には、何ミリもありそうな歯垢がつもりつもって、何カ月も寝たきりでいた様子がありとみえた。健康な人であれば到底耐えられぬ状態の中で、ただ死を待ったけの夫を見つめながら、さぞかゆかっただろう、苦しかったろうと涙がとめどなく流れた。

病室に入って三十分程たってから、不規則な呼吸の間隔が次第に長くなり、看護婦さんが「イソダさん、イソダさん」と声をかけながら人工呼吸をしてくださった甲斐もなく、一度も意識をとり戻さぬまま、帰らぬ人となってしまった。

一目だけでも逢わせてやりたいと、危険をおかして連れて来た我が子の顔も見ず、声を聞くこともなく、持参して行っただ好きはずのおはぎも一口も食べずして、三十四歳の夫はこの世を去った。幸薄い人生の幕切れであった。夢ならさめてほしい、夢であってくれたらとシラミ、だらけの夫にすがって泣いた。

翌日、夫の遺体を火葬することになり、その晩は病院泊りとなったが、悪いことは重なるもので、その夜、名古屋は上空襲に見まわれた。慣れぬ病院の建物の中で、しかも真っ暗な廊下を、長男には毛布をかぶせ、次男をしっかりと背負い、人の逃げる方向へついて行くだけで精一杯だった。ようやく避難場所を探し、落着いたのも束の間、恐ろしい焼夷弾の雨がまるで花

昭和四十年・田舎にて
初孫と



昭和三十八年・長男結婚



長男・次男の家族と共に

磯田さんのアルバムから

火のように光り輝きながら落ちてくる。ものすごい音と光と悲鳴で気がとおくなりそうで、もうこれで自分達も最期かと思ひながら「家に残して来た長女の為に生きて帰らせて下さい」と祈っていた。極限状態が続く、息のつまるような時間が長く続いた空襲であった。

翌朝の病院は、昨夜の爆撃で手足を無くしたり、全身火傷で呻く人達で、さながら地獄絵のようであった。亡くなられた人も多く、火葬場は死人の山で、蓋のない一つの柩に三人もの遺体が入れられ、焼けくずれた手や足が飛び出すというむごい有様だった。しかも火葬にするまで長い時間がかかるのだが、夫は兵隊であったという事で、特別に計らってもらい、お骨にすることができた。いずれにせよ、あまりにも残酷過ぎる光景であった。

夫の遺骨を抱き帰途についた名古屋駅は、到着するどの列車も超満員で何度か見送った。やっとの思いで飛び乗れた列車も乗ったら最後、身動きできず、むずかる背中の子を降ろすこともなだめることもできず、仕方なく泣くにまかせていた。そのとき、「お腹がすいたのではないか」とおにぎりをご馳走くださった車中の人の暖かい心に感謝しつつ、埼玉に到着するころには泣き声すら出ない有様だった。

やっとの思いで我が家に帰りついた私は、落ち着く暇もなく夫の葬式を出さなくてはならな

かった。お米、味噌、醬油、砂糖とすべて配給で、余分なものは何一つない状態で、隣組や、組合の人達の好意で、持ち寄りでの葬式を無事済ませることができた。

夫が亡くなって五ヵ月後の二十年八月十五日、悪夢のような戦争は終わった。けれど遺された私達家族には長く苦しい戦いの始まりでもあった。親子四人、この先どうしたらよいのか途方にくれながらも、毎日の生活は待ってくれない。夫の残してくれた小さな畑で、麦と少しの野菜を作っていたが、日増しに生活は苦しくなるばかりであった。

そんな私達を見て、今まで何事もなくつきあってくれた親戚、知人が、一人、二人と背を向けるようになり、それだけならまだがまんできたが、幼い子供同士のケンカでも、我が子がつらくあたられたことには、憤りさえ覚えた。未亡人となった私は、たびたびの、ばかにされた言動に憤り、大それた考えをおこしたことも何度かあった。今思い出しても背筋が凍るようなことをである。親子心中も考えた。だが、子供達の無心な顔を見ると、それもできず思いとどまることもあった。

二年が過ぎた頃、戦死の遺族に恩給制度ができたので、私も薬をもつかむ思いで役場へ行ったが、内地で病死した夫は、それに該当しないとのことだった。戦争さえなければ、死ぬこと

はなかっただろうに。どこで亡くなろうと同じ赤紙で召集された者なのに。何度も頼んでみたが、弱い者の声は届かず、諦め切れぬままに、年は過ぎた。

相変わらず生活は苦しい。生きる糧の麦も肥料が満足に買えず、不作が続く。どんなに不作でも、定められた分だけは供出しなければならない。穫れない、出せない、の悪循環が続いた。ある年のこと、その年も供出できずに悩んでいた。そこへ村の役人が来て「もし滞納すると米軍のジープが来て、どこかへ連れて行かれるよ」と脅す。私はどこへ連れていかれようとかまわれないが、遣される子供達のことを思つて必死に頼んだ。けれどその役人は自分の任を果たさんが為に、私に一言の話もなく、どこかよそで一俵の麦を都合して来て「借りて来てやつたから、これを出せばいい」と、恩着せがましく言う。

「借りて用が済むなら私にもたやすくできる。返すあてがないから今まで借りる気持ちにもなれなかったんじゃないの」

悔しさに胸が張り裂ける思いで、その役人に抗議した。そんなやりとりの末、結局その日から食べる為に残しておいた麦をあえて供出した。自分の畑がありながら、食べられる麦を作っていないが、わずか四人の食べる物がないなどとは、世の中が矛盾だらけに思えた。きばって